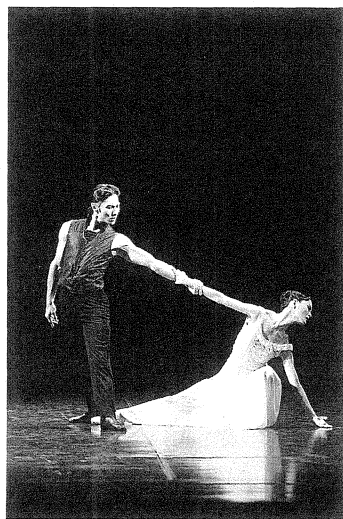


新国立劇場舞踊芸術監督としての11年

新国立劇場舞踊芸術監督
牧 阿佐美

『ボリス・エイフマンのアンナ・カレーニナ』エイフマン作品を日本のバレエ団として初演。ドラマを的確に表現したとメディアでも絶賛されました。

新

国立劇場は、2009/2010シーズン最後のバレエ公演「椿姫」を7月4日に終了いたしました。1997年10月に日本における最初の劇場付きバレエ団として誕生した新国立劇場バレエ団が、13年の月日を重ねてここまで来たと思えますと、大変に感慨深いものがございます。初代芸術監督の島田廣先生を引き継いでからは、舞踊部門が国際的に比肩する高水準のレパートリーと現代に対応した創造力をもつよう全力を傾けてまいりましたが、蓄積した演目は古典から現代創作

品まで8か国の振付家による42演目に達しました。幸いにも、劇場をご支援してくださる観客の皆様の声援は年を重ねるごとに大きくなってきたとほんとうに心強く感じております。

近年は、遠く沖縄や北海道からも公演を見るためにお客様が駆けつけてくださるまでになりました。東京初台の新国立劇場公演だけではなく、各地をお訪ねして公演する機会も増えました。また、米国やロシアなどから招待を受けて海外公演も行いました。

特

に思い出深い作品は、「マノン」(2003年10月)と「アンナ・カレーニナ」(2010年3月)です。マクミランの「マノン」は英国の誇る演劇性の強い舞台で日本のバレエ団には上演が困難と言われましたので、高い評価を得ることができて安堵しました。本年3月の「アンナ・カレーニナ」は現代ロシアを代表するエイフマン作品で、高度な技術と複雑な構成美をもつ大変難易度が高いバレエを日本のバレエ団として初演したものです。これら世界の名舞台を通過したことで新国立劇場はどんな作品にも対応できる力をもつバレエ団になったと思うのです。

2009年には、ロシア政府から招かれて総勢100名がモ



『牧阿佐美の椿姫』ボリショイ劇場公演の主役を務めた新国立劇場バレエ団の堀口純と山本隆之。二人の内面的表現力の高さが、モスクワの観客にも深い感動を呼び起こしました。



『牧阿佐美の椿姫』カーテンコールには、ロシア・ボリショイ劇場の満場のお客様がスタンディングオベーションで大きな拍手とブラボーの声を送ってくださいました。

スクワに渡り、ボリショイ劇場で「椿姫」(牧阿佐美振付)を上演しました。クラシックを基礎として日本人が創ったオリジナル作品がボリショイで上演されたのは初めてでした。いただいた多くの反響のなかでも「日本人ならではの繊細さと個性を発揮した舞台に感動」と評されたことは、日本の劇場の創造力を示せた意味からも、また、日本の若きダンサーが世界に挑戦した点からも、今後の発展につながるものになったのではと思えます。

今

夏には、芸術監督を退任いたしますが、これから専念したいことの一つは、バレエ研修所の充実です。国立バレエ学校のような教育機関が必要です。新国立劇場バレエ団やバレエ研究所、あるいはここから育って日本でプロとしてバレエを踊り続けるダンサーたちが今後いつその社会的認知を得るために、劇場や私たちがなをすべきなのかを考えますと、歩みは止められません。残念ながら、アジアの中国や韓国のように、日本より早く国立バレエ団とバレエ学校を創設して、予算も多々を投入しているのです。バレエは「身体の教養」「心の栄養」として、もつと国民の身近にあつていい存在です。そして、その中心に、常に新国立劇場があるといいと願っています。